

京都芸術センター制作支援事業

# 京都フィロムジカ管弦楽団 第37回定期演奏会

2015年6月28日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

♪曲目♪

モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲

Wolfgang Amadeus MOZART／Le nozze di Figaro, Overture

ラフ／交響曲第2番ハ長調 作品140 ※日本初演

Joachim RAFF／Sinfonie Nr.2

I. Allegro  
II. Andante con moto  
III. Allegro vivace  
IV. Andante maestoso - Allegro con spirito

—休憩—

スーク／交響曲第1番ホ長調 作品14 ※日本初演

Josef SUK／Symfonie č.1

I. Allegro, ma non troppo  
II. Adagio  
III. Allegro vivace  
IV. Allegro

指揮：池田 俊

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	辻 良治様	石川 美保子様
杉本 幸子様	西 英子様	黒田 直樹様
安藤 美知穂様	岡 喜久彦様	高畑 雅至様
遠藤 時金様	河内 尚和様	種坂 勝様
井谷 宏美様	森永 千一様	土屋 健太郎様
鎗本 和弘様	高岡 拓也様	松田 英太様
谷口 佳隆様	和田 之宏様	石川 由紀子様
西坂 壽美子様	玉山 茂夫様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方より  
ご支援いただいております。(5月現在)

新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

♪ロビーコンサート♪

13:15より

～今回のロビーコンサートでは、管楽アンサンブルをお届けします～

三浦 真里 / 『思い出は銀の笛』より

「エメラルドグリーン」の風」

「真紅のルビー」

「ブルー・パステル」

Fl. 間嶋、御園生、鳥山、高松

ロバート・サンダース / 『金管4重奏の為の組曲』より

「行進曲」

Tp. : 北山、芳屋 Hr. : 渡辺 Pos. : 宮下

## 指揮者

### 池田 俊 (いけだ しゅん)

兵庫県西宮市生まれ。大阪音楽大学において指揮法を研鑽、トランペットを齊藤広義氏に師事。卒業後、大阪フィルハーモニー交響楽団からのオファーを受け入団。在団中ドイツのデトモルト国立音楽大学へ留学。指揮法、室内楽、トランペットを学び、再び大阪フィルに首席奏者として迎えらる。大阪シュベルマー金管アンサンブルのコンサートにおいて指揮とトランペットを兼ね、[奨励賞] [本賞]を受賞。



1995年、大阪フィルを退団し本格的に指揮活動に入る。1997年、プリズベン国際プラス・フェスティバルに招かれ、

クインズランド音楽院でのマスター・クラスでオーケストラに関する演奏法やソロの指導と共にコンクールの審査も務める。

1998年関西フィルハーモニー管弦楽団と共に池田俊 指揮者デビュー・コンサートを開催し、豊かな音楽性を持つ才能ある指揮者！と絶賛され、[神戸っ子]のブルーリボン賞候補に指揮部門でノミネートされる。2001年、ブルガリア国立室内オーケストラを指揮し好評を得る。2004年、ブルガリアに渡欧し、第1回ワークショップにおいてブルガリア国立ソフィアフィルを指揮しディプロマを授与される。2009年、ウクライナのキエフ(リーセンコホール)においてウクライナ国立交響楽団を指揮し、スタンディングオベーションを受ける。また関西フィル、大阪交響楽団、広島交響楽団、奈良フィルハーモニー管弦楽団、エウフォニカ管弦楽団、ウインドカンパニー管楽オーケストラ等で指揮。近年は大阪市音楽団からも招かれている。アマチュア分野においては京都フィロムジカ管弦楽団、樫原交響楽団、墨染交響楽団、八尾フィルハーモニー交響楽団、立教大学交響楽団、西宮市吹奏楽団、その他等で客演指揮者として招かれている。

現在はプロ、アマを問わない多彩な指揮活動を行い、特にアマチュアのオーケストラや吹奏楽団などからは演奏向上に力を注いでいる“下町の名指揮者”として評価を受けている。

日本指揮者協会会員、高知大学交響楽団(名誉指揮者)、香芝シティ室内オーケストラ(専任指揮者)、JAPANアカデミー・トランペットアンサンブル指揮者(音楽監督)、奈良教育大学非常勤講師。

印刷のことなら

# 大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

## 曲目解説

Tp.: 遠藤 啓輔

### モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲

『フィガロの結婚』は軽妙なドタバタ喜劇。領主の家来フィガロと領主家の女中スザンナの結婚前夜、フィガロに横恋慕する女中頭や、スザンナに横恋慕する領主が二人の結婚を妨害するが、婚約者たちは妨害をことごとく撃退して領主たちをやり込め、最後はめでたしめでたしとなる。「女中頭が横恋慕したフィガロは、実は彼女の生き別れた息子だった」など、エディプス・コンプレックスを彷彿とさせる意味深なテーマも含んでいるが、基本的には笑いの連続で、特に機転の好いスザンナの活躍が痛快。『コジ・ファン・トゥッテ』のデスピーナもそうだが、身分の低さを知恵で克服して有力者に一泡吹かせる女性はヒロインの理想像だろう。

この序曲は、オペラの楽しさのエッセンスを蒸留し5分程度の短い曲中に封入したような、天才の筆が冴え渡った逸品だ。冒頭、弦楽器とファゴットの低音で演奏される序奏は、ワクワクするような期待感とともに曖昧模糊とした不確かさをも併せ持つ。結婚前夜の期待と不安、領主からの妨害に対する不安と、それをはねのけてやろうという心意気、そうした相矛盾する心情を昇華したようなこの序奏によって、モーツァルトは早くも聴衆をオペラの物語に引き込む。その後はきびきびとした音楽と、聴衆をびっくりさせるような強音の襲撃が繰り返され、領主と家来たちの逆転に次ぐ逆転のドタバタ喜劇を見事に簡潔に音楽化している。そして、冗談音楽でありながらもそれが常に気品に満ちている。ときおり転調して軽い愁いを帯びることがあるが、喜劇の中にも、親子愛をはじめとする真摯な人間愛が描かれていることの反映だろう。最後はこのオペラのハッピーエンドを予告するように幸福感に満ちたファンファーレで結ばれる。

### ラフ／交響曲第2番ハ長調

ヨアヒム・ラフ(Joseph Joachim Raff)は、スイスのドイツ語圏地域であるチューリヒ近郊の湖畔の村で1822年に生まれ、1882年に死去するまでドイツで活躍した。家は貧しく、イエズス会の教員養成学校で音楽教育を受けたほかは独学であった。しかし、メンデルスゾーン、リスト、ビューローらに実力を認められ、特にリストは、ワイマールの楽長に就任した際に1850年から56年までラフを助手として雇い、自作のオーケストレイション、パート譜の写譜、手稿譜の整理、編曲などの実務をラフに担わせた。こうしてラフは現場で音楽の実力を身に付けていった(草創期の大阪フィルで奏者業務の傍ら、写譜などをこなしながらやがて作曲家となった大栗裕を彷彿とさせる)。30代以降はピアノの教授や作曲家として活躍し、晩年はフランクフルトで音楽院の院長となった。一方で、サロン音楽のような軽めの音楽をも好んだという幅広さも持ち合わせていた。作曲家としては遅咲きながらも、11番まである交響曲をはじめとする膨大な作品を残した。ドイツ内外で名声を博し、ヴァーグナーやブラームスと並び称されたといい、R. シュトラウスやブルッフ、そしてチャイコフスキーらに影響を与えた。

本日演奏する第2交響曲は、1866年、作曲者40代の作品である。この時期、メンデルスゾーンやシューマンといったひと世代前のシンフォニストたちはすでに死去しており、次世代のブラームスは第1交響曲完成に向けていまだ呻吟中であった。一方で前年には、古典的和声の崩壊につながる画期的作品とも言われるヴァーグナー『トリスタンとイゾルデ』が初演されている。いわば、音楽が次の時代へと舵を切った時と言うべきまさにこの時に作曲された交響曲第2番は、「過去と現在の音楽の成果を融合することに歴史的使命を感じていた」というラフの自負心が反映された作品と言えるだろう。とりわけ、オーケストラの響きが豊かで、さすがは現場で叩き上げた作曲家の手によるものだと感心させられる。ラフのオーケストレイションは、ひと世代前のシューマン時

代とほとんど同じシンプルな楽器編成でありながら、楽器それぞれが持つ音色の違いを見事に生かして組み合わせ、淡く透明でありながらも程よく色彩豊かな響きを作り出す。そして、そのような豊かな響きを誇りながらも、ヴァーグナーのように重厚にはならず、むしろ軽快さを感じさせる。ラフは存命中、「諸様式の陳腐で魅力のない折衷」などという批判も受けたというが、この第2交響曲に聴くラフは明らかに独創性のある作曲家だ。

**第1楽章**は、ベートーベンの9番を彷彿とさせる曖昧模糊とした始まりだが、一瞬にして太陽が昇ったかのように明るい音楽がはっきりとした形を見せる。リズムの躍動感が魅力の第1主題に対し、第2主題はたっぷりとした歌謡性が魅力である。このように主題は対照的であるが、どちらも四分音符の刻みを基調にした簡潔な伴奏を基層に従えており、楽章を一貫したスピード感がある。伝統的なソナタ形式に則ってはいるが、簡潔な提示部に対し、再現部では副旋律が複雑に絡み合っており、そして異例なまでに長大なコーダはさらにポリフォニーが複雑になる、という、聴き進めるにつれてどんどん音楽の面白さが深まっていく心憎い構成を取る。

**第2楽章**は、快活な第1楽章とは対照的なゆったりとした楽章。簡潔な3部形式で書かれる。田園情緒あふれる第1主題部は基本的に一つの旋律しか用いていないながらも、伴奏音型を変化させたり、主役の楽器を順次交代させたりして目くるめく色彩の変化を感じさせる。中間部は対照的に、慄然とさせられるような厳しい音楽。切り刻むような伴奏音型の上で、悪魔的な跳躍を伴った旋律が叙事詩を語るように歌われる。しかし、中間部の終盤は憧れに満ちた音楽へと変化していき、再現部へ感動的に流れ出す。再現部は第1主題が提示部よりも遅しく堂々と歌われる。しかし楽章の最後では、悪魔的な中間部の主題が回想され、不穏な雰囲気を残して終わる。

**第3楽章**は、第2楽章の最後で現れた不穏な空気が現実になったかのような、不気味なスケルツォ。突進するようなスピード感に溢れているが、情熱的な中にも鬱々とした暗さを抱えた旋律で、悪魔が乗った騎馬隊が疾走しているような印象を与える。中間部は主部よりも長大で、中間部自体が3部形式を取る。規模の大きさだけでなく、軽快な音楽の中に悪魔の微笑みが隠されているような独特の雰囲気も含めて、ブルックナー9番のトリオを先取りしたような独創性を感じさせる。最後は冒頭の不気味な音楽が短く疾駆して終わる。

**第4楽章**の序奏は、堂々たる英雄的なアダージョ。主部に入ると健康的な明るさを持った音楽が爽快なスピード感を持って突き進む。展開部はやや深刻さを伴って、二重フーガが展開される。再現部を経て、第1楽章と同様に長大なコーダが展開される。とりわけ、まるで遠くから聞こえてくるように第1主題が静かに回想される場面はこの曲の白眉の一つだろう。最後はハ長調の分散和音が跳躍しながら鳴らされ、それらが徐々に収斂して堂々たるハ長調の和声にまとまって終わる。

## スーク／交響曲第1番ハ長調 Op. 14

ヨゼフ・スーク (Josef Suk 1874-1935) はボヘミア (チェコ) の村で生まれ、聖歌隊の指揮者をして同姓同名の父 (ちなみに、スークの孫も同姓同名で、高名なヴァイオリニストである) からピアノ、ヴァイオリン、オルガンの手ほどきを受け、プラハ音楽院ではチェコの国民的作曲家であるドヴォジャークに師事した (スークは後にドヴォジャークの娘と結婚するが、彼女が早世したため、その結婚生活は短かった)。

チェコ四重奏団の第2ヴァイオリン奏者としても名声を博し、ブラームスやハンスリックの賞賛を受ける。さらに、ピアニストとしても有能であった。晩年はプラハ音楽院で教え、弟子には今急速に評価が上がっているマルティヌーらがいる。

演奏活動や教育活動で多忙だったためか、遺された作品数は少なく、交響曲は2曲しかない。本日演奏する交響曲第1番は1897年から1899年にかけて作曲された。ロシアのチャイコフスキー、ウィーンのブルックナーやブラームスといった、時代を確立したシンフォニストたちが相次いで死去し、師のドヴォジャークは交響曲『新

世界より』やチェロ協奏曲、交響詩群といった晩年の傑作群を世に出した頃である。一方、同じチェコ出身の作曲家マーラーはこの頃に、第3交響曲によって独自の作風を確立した。交響曲が、ロマン派の最盛期から近代へと移る分水嶺の時代と言えるかもしれない。こうした時期に書かれたスークの交響曲第1番は、編成の簡潔さ、古典的形式美の遵守という点で、ロマン派の交響曲の最後の一花と言えるかもしれない。

スークの作風は、多彩なメロディーが溢れだすドヴォジャークの魅力をよく受け継ぐとともに、そうした膨大な音楽要素を盛り込みすぎて作品が肥大化しすぎるといった特徴もドヴォジャークとよく似ている。一つの主題部それ自体が多様な旋律群から構成され、さらに、こうした巨大な主題群が、魅力的な副主題や程よい躍動感のある伴奏リズムに支えられ、分厚い層をなした音楽を形成する。このようにポリフォニーに魅力があるのは、彼が第2ヴァイオリン奏者であったことと無関係ではあるまい。演奏時間自体はそれほど長くないが、極めて密度の高い、充実した作品である。

**第1楽章**はソナタ形式に則って書かれてはいるが、各主題部が複数の旋律の連なりで構成されていて非常に巨大な印象を与える。ホルンのソロで提示される第1主題部は、はじめは田園風景を思わせるのどかでのびやかな歌で、これが徐々に愁いを帯びてゆくが、主題部の終わりでは劇的に明転して輝かしい頂点を迎える。第2主題部は、クラリネットの感傷的なソロで始まるが、各楽器で歌い継がれるうちに、運命にあらがうような闘争的な性格を帯びてゆき、金管楽器を主体にした英雄的な頂点を迎える。深淵を覗き込むような凄みがある展開部は、第1主題部の再現部と融合しており、「ここからが再現部」とはつきりわかるポイントは無い。こうした構造はこの曲の直前に作曲されたブルックナー9番と似ており、時代性を感じさせる。第2主題部の再現を経て、コードで第1主題が一瞬回想された後、第2主題がファンファーレ風にアレンジされて輝かしく閉じられる。

**第2楽章**は3部形式の緩徐楽章。第1主題部は子守唄のように優しげな主題が繰り返し歌われる。しかし圧巻は低弦の先導によって突入する中間部だ。闘争的で厳しい音楽が繰り返され、そして、孤独を感じさせる（ブルックナー4番現行版の終楽章を彷彿とさせる）。こうした中間部を経て再現される第1主題は力強く逞しく成長したかのように感じられ、ホルンによって吹奏されるコードは英雄的ですらある。

**第3楽章**は悪魔が哄笑するような不気味さを湛えたスケルツォ。加速と減速を繰り返す複雑な進行で、迷宮に迷い込んだかのような不穏な雰囲気を感じる。切迫感のあるスケルツォ主部とは対照的に、中間部はたっぷりとした響きで伸びやかに歌われる。ほの暗い音色の中にも束の間の安息を感じさせる。スケルツォ主部の再現部は、提示部とリズムを微妙に変えているのが心憎い。また、主題をピッコロのソロで吹くというのも秀逸なオーケストレーションである。この時代としては異例なまでに簡潔な楽器編成であるこの曲において、ピッコロは唯一の特殊楽器と言ってよい。ピッコロの、地から足が浮いたような音色は、悪魔的なこの楽章において不穏な雰囲気を一層強め、胸騒ぎを感じさせる。こうした不安を煽るようなピッコロの使用法は20世紀のショスタコーヴィチが得意としたものであり、スークの先見性を感じさせる。

**第4楽章**は第1楽章と同様、巨大に拡張されたソナタ形式を取る。冒頭で低弦によってほのぼのとした第1主題が提示され、行進曲風の楽節を経て、雄大な歌謡主題によって提示部の頂点を築く。展開部は、静謐で神秘的な音楽であり、そしてときに不穏な空気を漂わせる。そうした中、金管楽器による讚美歌風の楽節が異彩を放つ。強弱の変化を多用した動的な詠唱は、清澄なドイツのコラールとは雰囲気を異にしており、むしろ同じチェコ出身のマーラーのような朴訥とした力強さがある。提示部の音楽がさらに神秘性を加えて再現された後、第1主題が輝かしく、しかしどこか悲壯感を湛えて吹き鳴らされてこの大曲は閉じられる。

# 京都フィロムジカ管弦楽団

## Philomusica Orchester Kyoto

### Konzertmeisterinnen Bratsche

馬渕 清香※  
(Mozart, Suk)  
八木 愉希絵  
(Raff)

小坂 智子  
渡邊 泰里  
鵜飼 大介・  
宇田 新一・  
久保 将哉・  
樽林 哲也・  
西山 遼・  
古田 直道・  
紅谷 恵子・  
吉川 昌毅・  
岩井 英樹※

### Violine

小幡 拓也  
中居 楓子  
藤井 まきは  
森 亜紀  
八木 愉希絵  
安江 絵美子  
渡辺 達之輔  
青木 麻須美・  
須田 謙史・  
高谷 祐介・  
谷内 優子・  
中島 幸・  
安原 由克子・  
好村 塁・  
渡邊 隆寿・  
後藤 周・  
佐々木 啓佑・  
佐々木 萌子・  
堤 有里紗・  
吉川 正剛・  
香川 玲子※  
福澤 敬子※  
馬渕 清香※

### Violoncello

多田 進  
秦野 貴生  
松浦 悟子  
松浦 由香  
奥村 友梨香・  
岡野 正義※  
高畑 雅至※  
高村 誠※

### Kontrabaß

亀谷 友紀  
茂原 尚樹  
田中 明江  
田中 郁太郎  
藤井 輝之  
丸山 拓史・  
後藤 志帆※

### Flöte

高松 香陽子  
(Piccoloflöte)  
鳥山 梓  
(Piccoloflöte)  
間嶋 美波  
御園生 香  
山口 佳美

### Oboe

梶原 めぐみ  
木津 怜美  
大王 恵里子

### Klarinette

関 英子  
山本 拓

### Fagott

石塚 有里子  
大槻 萌絵  
桃川 大毅※

### Horn

加藤 実可子  
北山 絵里  
中澤 美帆  
山影 つぐみ  
渡辺 悠  
真浜 将吾・  
干場 信孝※

### Trompete

遠藤 啓輔  
北山 武志  
芳屋 正幸・

### Posaune

中村 三鈴  
藤井 舞  
宮下 秀行

### Tuba

中塚 隆介※

### Pauken

榎井 渉※

・ : 団友

※ : 客演奏者

### 団長

多田 進

### 事務

西村 浩

### 弦トレーナー・客演コンサートミストレス

馬渕 清香

大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R. プレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シエナのギジアーナ音楽祭ギジアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィイヴァン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッピオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンドル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

### 弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

### 管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第38回定期演奏会♪

2015年12月27日(日) 京都府長岡京記念文化会館

リスト(ミュラー編曲) / ハンガリー狂詩曲第2番

ウォルトン(バッハ原曲) / バレエ組曲『賢い乙女たち』

ブラームス / 交響曲第4番

指揮: 木下 麻由加

(予定)

## ♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～  
私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

### <募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (弦楽器急募!!)

オーボエ・クラリネット・トランペット / 打楽器 (※打楽器は諸条件について要相談)

〔入団資格〕 練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 毎週日曜日(午後1時～午後5時) 春と秋に練習合宿(大津市内。合宿費は10,000円程度)

〔練習場所〕 京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など

〔諸費用〕 活動費: 3,000円/月 演奏会参加費: 20,000～30,000円(学生・初参加の方には割引あり)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilo.com](mailto:recruit@kyotophilo.com)

## ♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

〔年会費〕 1口 1,000円

〔期間〕 ご入会いただいた月より1年間

〔特典〕 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: [tomo@kyotophilo.com](mailto:tomo@kyotophilo.com)

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。